

現代レトリックの流れ

村越行雄

現在、世界的に注目を浴びているレトリックには、長い歴史があり、それぞれの時代で果たしてきた役割にも様々な側面が見られ、「レトリック」という言葉が持つ意味の多様性の理解は、現代的な意義を知る上でも、必要不可欠なものであると言えよう。そこで、現代レトリックが今回のテーマであるが、その歴史的な背景の簡単な考察から始めることにする。

歴史的に見て、最初に注目すべきことは、紀元前5世紀頃に活躍したソフィストであろう。ただ、残念なことは、プラトンやアリストテレスなどの古代ギリシャ時代の代表的な哲学者によって激しく非難されたことで、詭弁家と訳されているように、哲学として認められなかっただけでなく、その存在意義の根底そのものが否定されてしまったことである。ともかく、古代ギリシャ・ローマ時代のレトリックは、相手をいかに説得して、納得させるかという説得性を特徴・機能とする弁論術のことであった。そこには、古代ギリシャ時代の都市国家アテネにおける直接民主制があ

り、多くの人々を説得する弁論術の重要性が見えてくる。しかし、時代が進むにつれて、弁論が果たす社会的役割が減少し、中世から近代にかけて、レトリックは変化していった。

古代ギリシャ・ローマ時代のレトリックについて、その内容を簡単に言えば、次のようになる。

レトリック Ⅱ 弁論術

- 発想（何を言うのか？）
- 配置（どのような順序で言うのか？）
- 修辞（どのような言葉で表現するのか？）
- 記憶（どのように覚えるのか？）
- 発表（どのように人前で発表するのか？）

レトリックにおける五部門は、人々を前にして自らの主張を行なう弁論の技を表しており、例えば、現代的に解釈して言えば、ある頼みごとをする時、いきなり直接的に、頼みごとを言うのではなく、まず何を言うのか、話題にする材料を決めなければならぬし、次にそれらの話題をどのような順序で言うのかを決めな

ければならないし、更に具体的にどのような言葉を使って、表現していくかを決めなければならぬし、それらのことが決まっても、実際に人々の前できちんと言うためには、以上のことを覚えておかなければならないし、人々の前で言うには、ただ口から言葉を発するだけでは十分ではなく、動作など、言葉以外の様々な手段を用いて発表しなければならぬことになり、そのことであることを頼むことになる。勿論、古代ギリシャ・ローマ時代の弁論術は、個人的な段階の頼みごととは異なり、多数の人々を前にして説得することに関することであつたが、より理解しやすいように、現在日常的に行なわれている個人レベルでのコミュニケーションを取り上げたことと、更に古代レトリックの現代的意義を理解することの重要性を示すことにも役立つと思つたからである。事実、現在盛んに議論されているコミュニケーションの定義に関連して、古代レトリックを取り入れる主張がある程である。古代ローマ時代から始まり、中世に入り、更に近代へと進むと、一般大衆にとって、弁論の機会がなくなると同時に、その社会的役割も激減してしまつた。ここでは、弁論術の五部門の一つである修辞を中心にして、レトリックは修辞学として変貌してしまつた。そして、修辞学としてのレトリックは、言語表現の技に集中し、その極限にまで達する結果になつてしまつたのである。美しい言葉で飾り立てるといふ美的裝飾性が極限にまで行つてしまつたのである。美的裝飾性を機能・特徴とする修辞学は、結果的に、

そして最終的には、詩や小説などの文学という世界で開花し、従つて一般大衆の日常生活から掛け離れ、特定の領域に限定された技ということになつてしまつた。

美しい言葉で飾り立てる技をひたすら極めたり、一般性・日常性から離れて、特定の領域に限定されればされるほど、修辞学としてのレトリックの限界を示す結果になつた。それに、科学技術の発展に伴い、科学主義や客観主義が浸透し、真実や事実をそのまま文字どおりに表現すればいいのであり、それこそが必要であつて、言葉で美的に裝飾する必要はないという時代背景もあつた。ともかく、レトリックは表舞台から姿を消し、消滅したと言われている。そして、20世紀に入つて、レトリックは復活することになり、そこから現代レトリックが始まることになつた。

レトリックは、古代ギリシャ・ローマ時代の「弁論術」(説得性)から中世・近代にかけての「修辞学」(美的裝飾性)へと変化した。20世紀以降の現代レトリックとしては、「比喩論」とくに比喩の一部である「隠喩論」としてとらえることができる。そこには、弁論術の一部である修辞、そして修辞の一部である比喩、さらには比喩の一部である隠喩というレトリックの対象領域の縮小傾向が見えてくる。それは、それぞれの時代におけるレトリックの社会的役割の変化を示すものである。そして、今ではその縮小傾向とは反する形で、古代レトリックにおける弁論術の五部門を総合的に見直し、取り入れようとする動きがコミュニケ

ーション論で見られることも事実である。

現代レトリックを比喩論としてとらえるにしても、その機能・特徴として何が考えられるであろうか。認識論的な説明がなされるのがよくあるが、それを受け入れながらも、現在のレトリックの復活と浸透力を考えるとそれだけでは十分とは言えず、的確さ・効率性に基づく表現の経済性としてとらえる必要があるように思われる。比喩を使用するにはそれなりの理由があり、しかも日常生活だけでなく、全ての領域で使用される言語表現にとって根源的なものであると言えるはずである。自らが考えたり、感じたことなどを表現し、相手に伝える時、比喩なしに、それらに対応するように、全ての場合に、一つ一つ適切な言葉を作り出していたら、私たちが覚えなければならぬ単語の量が膨大すぎて、現実的に不可能であり、従って比喩的用法によって、単語に様々な意味での使用を可能にさせ、そのことで限られた単語数で無限とも言える表現を可能にさせることは、十分説明のつくことである。それ以外にもある。日常生活では、簡潔に表現することが重要であり、コミュニケーションによって人間関係を維持する上でも、その簡潔さは必要不可欠である。例えば、女性に対して「君はバラだ。」(隠喩)と言う場合、単に「君は美しい。」というだけや「君は美しい。」と言えたいのであれば、そのまま「君は美しい。」と言えたいだけで、それを「君はバラだ。」と言うには理由があるはずである。「美しい」と言わずに、バラにたとえており、しかもユリ、野菊、

カーネーションなどの他の花ではなく、花以外のものでもなく、あえてバラにたとえるには、それなりの理由があるはずである。例えば、ただ単に「美しい」だけでなく、華麗で、刺の恐さなどの様々なバラのイメージを伝えたいのであり、「君は美しくて、華麗で、恐くて、……」という具合に、長く列挙するのでは、伝えたいこともうまく伝わらず、コミュニケーションの弊害をもたらすことにもなり、むしろバラにたとえることにより、簡潔になるだけでなく、自らの伝えたいことを的確に、効率よく表現できるようになるのである。

現代レトリックを比喩論として、その機能・特徴を的確さ・効率性に基づく表現の経済性としてとらえることは、言語表現、更に人間コミュニケーションの根源をなすところにレトリックが位置していることを意味し、それだけにレトリックの現代的意味での重要性が明らかになると言える。そして、現在のレトリックの世界的な広がりも納得できるものと言える。

20世紀に復活したとされるレトリックが現代レトリックの始まりであるが、その現代レトリックに対するとらえ方にも様々な可能性があると思われるが、ここではそれを網羅的にとらえるのではなく、一つの可能性として説明していきたいと思う。現代レトリックは時間の経過とともに、その広がりを見せ、深化してきたが、その中であって、現在の躍進の基礎をなし、すでに現在から見て「古典」と言える基礎理論が存在している。

現代レトリックの源流とされているのが、I. A. リチャーズ『新修辞学原論』（一九三六年）であり、M. ブラックの論文「メタファー」（一九五四年）であるが、ここではそれらを取り上げずに、現代レトリックの新「古典」論と評価できるような、上記以外の、重要な基礎理論をいくつか取り上げ、それを現代の欧米型と現代の日本型に分類して考えていくことにする。勿論、現代の欧米型にも、現代の日本型にも、多種多様な傾向が見られ、両者の単純な区別を困難にさせているが、あえて特徴的に目に付くものと思われるものを取り上げていくことにする。

現代レトリックの欧米型でまず注目しなければならない理論に、G. レイコフの隠喩理論がある。M. ジョンソンとの共著 *Metaphors We Live By* (邦訳『レトリックと人生』)、その他の著書などで示されているが、彼自身によれば、一九七九／一九八〇年が隠喩研究における革命的転換期ということになる。そこには、文字どおりの発話が標準で、その標準から逸脱したものが比喩的発話であるという考え方に対する激しい批判が存在する。比喩こそが、全ての領域における表現にとって、必要不可欠な存在であり、それなしには表現そのものが不可能になってしまうという考えがある。そして、比喩における主要な要素として挙げられる隠喩、換喩、提喩については、提喩を換喩の一部として取り入れ、伝統的な分類を否定し、隠喩と換喩の二分類を主張している。

次に、注目すべきものは、語用論の主要理論に基づく比喩理論

である。つまり、J. L. オースティンとJ. R. サールの言語行為理論、H. P. グライスの会話含意理論、そしてD. スパーバーとD. ウイルソンの関連性理論に基づく比喩理論のことである。最初は、サール自身の論文“Metaphor” (邦訳「隠喩」) で示された隠喩理論であり、次は、グライス自身は具体的には比喩理論を展開していないので、グライスの理論的枠内で隠喩理論を展開しているA. P. マルティニツヒの論文“A Theory for Metaphor”であり、最後は、スパーバーとウイルソンの共著“Loose Talk”と *Relevance: Communication and cognition* (邦訳「関連性理論」) で示された隠喩理論である。言語行為理論、会話含意理論、そして関連性理論は、比喩理論以前に、語用論における主要な理論であり、更に言語理論として、またコミュニケーション理論として、大きな影響力を持つ理論であって、それに基づいて示される隠喩理論も当然の事として同様の扱いを受けている。

サールとグライスは、比喩を標準的な表現からの逸脱ととらえる逸脱説の代表者と思われている人物であり、またレイコフなど、多くの研究者による逸脱説への批判を受ける代表者でもある。しかし、字義性（文字どおりの意味で解釈すること）を標準とする考え方は、日常的に一般的に見られることで、様々な分野で、言われた言葉や書かれた言葉の文字どおりの意味での解釈が判断基準になることはよくあり、従って、レイコフなどのように、非字義性（比喩などのように、文字どおりの意味で解釈できないもの）

を基準に見直す考え方は、彼自身が言うように、革命的転換と言えるかもしれない。

では、現代レトリックの日本型は、どうであろうか。勿論、レイコフの影響は極めて強いし、語用論も同様であるが、それでも日本型にとっての固有の特徴があると言える。その代表格が佐藤信夫氏の『レトリック感覚』で展開されている比喩理論であり、それを引き継いだ瀬戸賢一氏の『認識のレトリック』で展開されている比喩理論である。それは、しばしば軽視あるいは無視されてきた提喩と換喩の存在意義を認め、隠喩、換喩、提喩のそれぞれが存在意義を認めるものである。欧米では、隠喩を中心にして、提喩を換喩の中に組み入れたり、提喩と換喩を隠喩に組み入れたりと、伝統的な分類とは異なる方向に進んでいるが、日本では隠喩、換喩、提喩のそれぞれの独立した存在意義を認めるもので、伝統的な分類を認める一方で、その分類の基準を新たな視点から見直すものである。ただ、欧米では、日本型の比喩の分類方法を評価していないのが現状である。

詳細な検討はここではできないが、上記のものが現代レトリックにおける新「古典」と呼ぶにふさわしいもので、現代レトリックを理解する上で、極めて重要なものである。古代ギリシャ時代からの歴史的過程の中で、そして現代においても、「レトリック」という言葉は、様々な意味合いで使用されてきたし、現在もそうであり、レトリックの理解には、そのような現実を把握する必要

があることは明らかである。その意味で言えば、現代レトリックを理解するには、上記の新「古典」の理解が必要不可欠であると言えよう。「古典」とは、時間的に古く、忘れられたものではなく、現在を知る上での原初であり、根源であり、それなしには真の理解が不可能になるほどのものであると言っているであろう。従って、現代レトリックにおける新「古典」を知ることが、現代レトリックの真の理解につながることに言えよう。真の理解を得るには、古典に学べ！

参考文献

- Lakoff, George and Johnson, Mark, *Metaphors We Live By* (The University of Chicago Press, 1980). 邦訳には『レトリックと人生』(大修館書店、一九八六)がある。
- Martinich, A. P., "A Theory for Metaphor", *Journal of Literary Semantics* 13.
- Searle, John R., "Metaphor" in J. R. Searle, *Expression and Meaning* (Cambridge University Press, 1979).
- Sperber, Dan and Wilson, Deirdre, "Look Talk", *Proceedings of Aristotelian Society* 86 (1985/6).
- Sperber, Dan and Wilson, Deirdre, *Relevance: Communication and Cognition* (Blackwell, 1986). 邦訳には『関連性理論—伝達と認知』(研究社出版、一九九三)がある。
- 佐藤信夫、『レトリック感覚』(講談社学術文庫版、一九七八)。
- 瀬戸賢一、『認識のレトリック』(海鳴社、一九九七)。